

平成22年度県庁ギャラリー展示

広島県の歴史絵はがきと観光資料

— 戦前戦後の海・川・町 —



広島県立文書館では、県の行政文書・行政資料や古文書などを大量に収蔵していますが、その中に戦前の広島県内の様子を写した絵葉書も多数含まれています。当館が収蔵するこれらの「歴史絵はがき」は、総数約 2,500 点にのぼり、まだカメラが一般に普及していなかった時代の様子をとらえたものとして、現在では貴重な歴史資料となっています。また、単なる戦前の写真ではなく、観光みやげとして広く販売されたものであり、そこには広島県の魅力を伝えようとした当時の撮影者や発行者の意図も込められています。

この展示では、広島県の歴史絵はがきの中から、特に瀬戸内の海・川・町に焦点を当て、往時の広島県のにぎわいや風光をとらえたものや、今では見ることのできない歴史的景観を写したものを中心に紹介します。

また、絵葉書に関連して、戦前・戦後の観光に関わる様々な資料も紹介します。戦前に発行された観光案内書や当時流行した色鮮やかな鳥瞰図、また、戦後の広島で初めて発行されたグラフ誌『LIVING HIROSHIMA (生きている広島)』、更には大量に発行された様々な観光パンフレットなど、広島県の魅力を再発見させてくれる貴重な歴史資料と言えます。

歴史資料は 過去・現在・未来をつなぐ 私たちの財産です

広島県立文書館

○ 歴史絵はがきに見る広島県の海・川・町

明治末期から昭和初期にかけての時代は、様々な絵葉書が大量に発行され流通した、言わば絵葉書大流行の時代であった。明治33年(1900)10月、私製葉書の発行が許可されると、雑誌の付録などの形で絵葉書が発行されるようになり、その後、明治35年6月には、逓信省が官製の絵葉書が発行するようになり、まもなく本格的な絵葉書ブームが到来した。特に、日露戦争を契機として凱旋行事を題材にした絵葉書が大流行すると、次第に各地の名所絵葉書や様々なイベント・行事の記念絵葉書なども各地で発行されるようになった。

ここに紹介する絵葉書も、こうしたブームに乗って広島県内で発行されたものである。瀬戸内特有の海の情景と、広島川の情景、更には現在見直されている古い町並みのかつての景観を、これら絵葉書から垣間見ることができる。

海

塩田風景

竹原塩田



芸備地方最古で最大の入浜式塩田。もともと竹原湾であった場所を埋め立て開発しており、慶安3年(1650)に塩田が築調された。昭和35年(1960)に塩田整理法で廃止されるまで300年余の間、竹原の経済を支えた。

ふたまで
忠海町二窓塩田



忠海港は寛文3年(1663)に三次藩の蔵米移出港として整備された。二窓は忠海の東部に位置し、絵葉書に見える塩田は正徳年間(1710年代前半)に開かれた。旅館の南に広がる入浜式塩田を眺めているところ。

尾道周辺の塩田(吉和浜塩田)



千光寺公園より鯨島(中央部)を写したもので、島の下側に見えるのが吉和浜塩田。尾道の西側、吉和村の海岸を埋め立てて造成した入浜式塩田で、元禄～正徳年間(1600年代末～1710年代前半)に築調された。

海水浴場

五日市海水浴場(広島市佐伯区五日市)



海老山周辺に明治30年(1897)頃に開設され、県内最古の歴史を有すると謳われた海水浴場。海老山東側の海浜院(宮田旅館)は山陽鉄道開通後、潮湯・むし風呂を開設、西側山麓にも海老館・神明館・朝日館などが開設された。

上は、海老山西側山麓に大正期に入って開設された和洋料理・旅館の中島亭(中島館)。

じごぜん
地御前海水浴場(廿日市市地御前)



大正14年(1925)7月、広島電鉄宮島線の終点として地御前駅が開業し、地御前海岸は広島郊外の海水浴場として賑わうようになった。

まとはかだん
竹原の場花壇（竹原市）



明治40年（1907）にできた旅館・海水浴場・娯楽場・運動場などからなる施設。現在はの場海水浴場となり、公園が併設されている。

いわしじま
岩子島海水浴場（尾道市）



大正期頃の岩子島海水浴場。写真中央の砂浜に、岩子島巖島神社の石灯籠がかすかに見える。この海岸は現在も残っている。

海岸風景

江波公園



江波山はかつて皿山とつながり、瀬戸内海の小島（江波島）であったが、明治期になって干拓で陸続きとなり、広島市の公園となった。

廿日市海岸

廿日市港から南方向を望んだ風景。正面に住吉神社の鳥居が見える。現在も港近くに神社があるが、現在の住吉神社は、昭和58年の県道拡幅工事のため場所が移転している。また、港の沖合いには埋立地が広がっており、この絵葉書の風景も現在は大きく変わっている。

こごい
井ノ口海岸・小己斐明神（広島市西区井口明神）

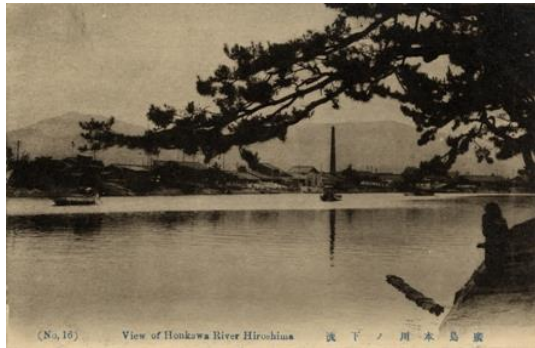


明治末期頃の井ノ口海岸。小己斐明神の岩礁が海辺に浮かぶ美しい海岸風景を見せていた。白砂青松の景勝地として知られていたが、西部開発による埋め立てで、このあたりの風景は一変した。岩礁は現在、広電井口電停近く、井口明神西部埋立第二公園内に見ることができる。



川

川の風景



太田川（本川）の風景

(左上) 大正～昭和初期頃の河口付近の風景。

後方に宮島の弥山が見え、手前には帆を閉じた木造和船が並んで停泊している。

(左下) 大正期ころのもので、手前に松の枝が張り出していることから、住吉神社の松並木付近から撮ったと思われる。

(右上) 昭和 17 年（1942）陸軍運輸部検閲済の絵葉書。大芝付近で撮影したもので、後方に武田山が見える。



太田川（本川）河畔の住吉の浜

住吉神社とその後方には木造の大型帆船が帆を閉じて数多く停泊している。明治末期かそれ以前の撮影と思われる。



大正期頃の元安川下流の風景



大正期頃の元安川下流の賑わい

絵葉書には「太田川」とあるが、元安橋付近から南側を撮影したもの。後方に見える洋風の塔は日本火災広島支店、右側の大きな建物は不動貯蓄銀行で、いずれも大手町筋にあった。

多数の川舟が通行し、川岸には家屋が密集している。川が生活の場となっていた様子がうかがえる。

橋の風景



常盤橋（広島市南区大須賀町～中区東白島町）

常盤橋は、明治12年（1879）に木造橋として京橋川に架橋された。江戸時代には橋梁の建設は制限されていたが、明治になって解禁となり、もともと渡し場であった位置にこの橋が架けられた。昭和3年（1928）6月、水害により流出し、翌年鉄筋コンクリート製の橋に架け替えられた。新しい橋には鉄製の高欄が取り付けられていたが、太平洋戦争による金属供出で取り外され、石製の高欄に付け替えられた。



京橋（広島市南区京橋町～中区橋本町）

京橋は、天正19年（1591）、毛利輝元の広島入城の年に木造橋として架橋された。西国街道の基幹橋の一つで、京へ続く橋として「京橋」と名づけられた。かつては西国街道を猿猴橋・京橋を渡って西へ行くと、広島城下の盛り場へつながっていた。昭和2年（1927）8月に鋼橋となった京橋は、その後原爆の爆風にも耐えた。



柳橋（広島市南区金屋町～中区銀山町）

柳橋は明治11年（1878）、地元住民によって木造橋として架けられた。江戸時代は藩の規制により、京橋川に架かる橋は京橋だけであった。左側に橋の名の由来となった柳の木が見える。昭和戦前期頃のもの。



御幸橋（広島市南区皆実町～中区千田町）

御幸橋は明治18年（1885）、宇品築港事業に伴って架橋されたとされる。当時、長さ140間（約255m）と広島市内で最も長い木造橋であったため、「長橋」と呼ばれたが、同年8月、明治天皇の広島行幸を機に「御幸橋」と改称された。

大正元年（1912）に路面電車が開通した際、橋に軌道を通すことができなかったため、当初は橋の西詰で電車からいったん降りて徒歩で橋を渡り、東詰の電停から宇品行きに乗り換えていた。その後、電車専用鉄橋が併設されることで直通となり、更に昭和6年（1931）5月、道路・軌道併用橋となった。現在の橋は3代目で、平成2年（1990）に竣工した。

町

市街地



鈴蘭灯（広島本通）

革屋町（現・本通電停付近）の様子。大正初め頃から八丁堀や新天地の賑わいが増すにつれ、元安橋東詰から新天地入口へと通じる本通りも繁華街として発展していった。街を彩る鈴蘭灯は大正10年（1921）夏に常置されたもので、当時、市内の各地に鈴蘭灯が設置された広島は、「全市鈴蘭灯の大会」とも称されたほどであった。

昭和16年（1941）、金属供出により、鈴蘭灯は取り外された。

鈴蘭灯（呉市中通）

大正～昭和初期頃の呉市中通。小さな明かりを数多く灯す鈴蘭灯は、商店街や盛り場にふさわしい照明として支持された。狭い街路では左右交互に位置をずらして建てられたが、道幅の広い呉市中通では、このように道路の両側に左右一対で建てられていた。



広島新天地

新天地は、大正10年（1921）に堀川町の広島中央勸業場跡にできた繁華街。昭和2年には東新天地ができて東西2ヶ所となった。劇場・寄席・活動写真館（昭和10年代以降は映画館と称される）、喫茶店・カフェなどが広島で最も多く集まり、盛り場として賑わった。

新天地の絵葉書は当時数多く売り出されている。それまでの盛り場（勸工場・勸業場などと呼ばれた）は、いくつかの遊戯場に小規模な店が軒を連ねる程度であり、大正期になって次第に活力を失っていった。新天地は、多くの新しい娯楽施設が密集し、また市内ではじめての喫茶店ができるなど、八丁堀付近（千日前）と共に、新たな盛り場の姿を印象づけた。



新天地西入口

大正10年（1921）新天地開場当時の賑わいを写す。入口左は化粧品店の「中忠」。右は時計店の「黄金屋」。



新天地映画倶楽部（泰平館）

新天地東入口側から西方向を見たところ。もとは、青い鳥歌劇団の上演場として設けられたオペラハウス。同劇団が解散したのち映画館となった。



新天地（右）と日進館（奥）

映画倶楽部（泰平館）の館内から見た風景と思われる。日進館は、無声映画時代は盛況であったが、その後発声映画（トーキー）が現れると衰退し、漫才小屋となった。

名所・旧蹟・文化施設

広島大本営

明治 27 年（1894）に勃発した日清戦争を指揮するため、広島城内に置かれた最高統帥機関。木造 2 階の洋館は、元は第五師団司令部の会議室であったが、同年 9 月 15 日、戦争指揮のため明治天皇の御座所となった。同 29 年（1896）に大本営が解散となった後は文化財として保存され、観光名所にもなったが、原爆により焼失した。

なお、玉座の両側に置かれていた金屏風は長く県が保管してきており、現在は広島県立文書館に移管されている。



（左）大本営本館。後方に広島城天守閣が見える。

（右）噴水を挟んで右が大本営本館，左が昭憲皇太后御座所。



比治山御便殿

御便殿は日清戦争の際に設けられた明治天皇の行在所。もともとは大本営と共に広島城内に設けられていたが、明治 28 年に広島市へ払い下げられ、同 42 年、比治山へ移築された。

比治山公園遠望

鶴見橋からの比治山を望む。山上に御便殿が見える。比治山はもと国有林であったが、明治 31 年（1908）より広島市が公園として整備した。水が引いた京橋川で子供たちが遊ぶ明治末期頃の風景。現在は緑地帯となっている川沿いも、当時は建物が密集していた。

広島庭園



泉邸（縮景園）

元和 6 年（1620）に広島藩主浅野長晟が家老の上田宗箇に命じ、別邸の庭園として作庭させたもの。明治以降「泉邸」と呼ばれた。昭和 15 年（1940）に浅野家から県に寄付され、国の名勝に指定された。

絵葉書はいずれも明治末期頃のもの。広島の名所絵葉書の中でも泉邸の絵葉書はとくに多い。



しゅんわえん
春和園

弘化元年（1844）に年寄・今中相親に藩主が与えた下屋敷で、広島城下国泰寺村（現在の市役所の北隣）にあった。明治中期には料亭として営まれ、その後43年（1910）には、市営の公会堂となった。第二次大戦中の建物疎開により、取り壊されている。

よらくえん
與楽園

広島藩主浅野重辰が藩主別邸の庭園として広島城下水主町（現・加古町）に造らせたもの。文政9年（1826）に完成した。

明治5年（1872）頃、一部が広島県会議事堂等の敷地となったが、大部分は県立病院の庭園となり、市内の名勝となった。被爆後も存続していたが、現在はアステールプラザなどが建ち、当時の面影はうかがえない。



国泰寺

文禄3年（1594）、安国寺恵瓊が臨済宗の寺院「安国寺」として創建。関ヶ原の戦いで恵瓊が刑死した後、広島に入封した福島正則の弟普照が入寺し、曹洞宗の「国泰寺」と改められた。

現在は己斐に移転しているが、かつては中区中町のANAクラウンプラザホテルの場所にあった。ホテル正面の愛宕池跡は寺の遺構であり、かつてはこの付近が海岸線であった。江戸初期に境内南側に新開地が開かれると、寺の名に因んで「国泰寺村」（現・国泰寺町）と命名された。

広島東照宮の桜並木

慶安元年（1648）、広島藩2代目藩主浅野光晟により創建。徳川家康の外孫（生母振姫が家康の三女）であった関係から、光晟は東照宮造営に熱心であった。

かつて東照宮の前には約500mほどの桜並木があり、参勤交代の際に大名がこの並木を通過して参拝したというが、原爆により焼失した。



浅野図書館

大正15年（1926）3月、浅野長晟の広島入城300年を記念して浅野家が小町の電車通り沿いに建設。昭和6年（1931）、広島市に寄贈、市立浅野図書館となった。

原爆により焼失。戦後は、昭和30年に国泰寺町で再開した後、同49年、基町に広島市立中央図書館として開館した。

現在も、被爆から逃れた旧浅野図書館の蔵書約1万点のほか、浅野長愛氏から寄託された約1万2000点の古文書類など、貴重な歴史資料を収蔵している。



かんこかん
広島観古館

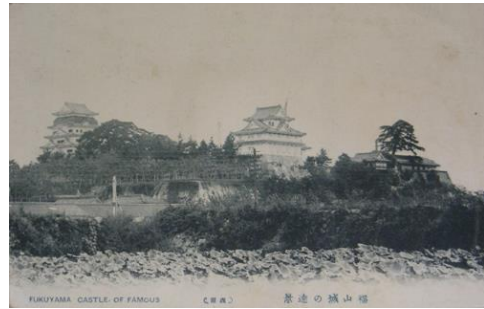
旧藩主浅野家所蔵の書画、古器物、武具、茶器等を一般公開した施設。大正2年（1913）に縮景園内に建てられた。大正期には月平均3500人が入館した。

現在、跡地には県立美術館が建つ。

福山城



福山城の三の丸外堀東側から見たところ。手前の外堀は大正3年(1914)に両備軽便鉄道福山駅敷設のため埋め立てられており、それ以前に撮影されたもの。また、右手の櫓は物見櫓で、戦災により焼失し、現在は石垣が残されている。



福山城の三の丸外堀南西方面から見たところ。外堀は大正初期に順次埋め立てられ、最後に残った西外堀は、昭和10年(1935)に福山高等女学校(現葦陽高校)の運動場拡張のため埋め立てられ、完全に消滅した。

JRの高架線が走る現在では見ることでできない遠景。近世最後の大規模城郭と言われた威容を偲ぶことができる。

港町

こぎぶねふなおろしき
江波港の風景(漕船船卸式)



江波は江戸時代、広島城下の外港として栄えた半農半漁の集落であった。幕末には横浜・神戸のように貿易港にする案もあったが、版籍奉還により白紙となり、その後明治22年(1889)の宇品築港により、外港の地位も宇品に譲る形となった。

絵葉書は明治末期頃の船卸式の様子を写したもので、海岸に面して藁葺屋根の林立する集落が見える。集落後方に見える木立は丸子山不動院。

三津町の町並み(東広島市安芸津町)



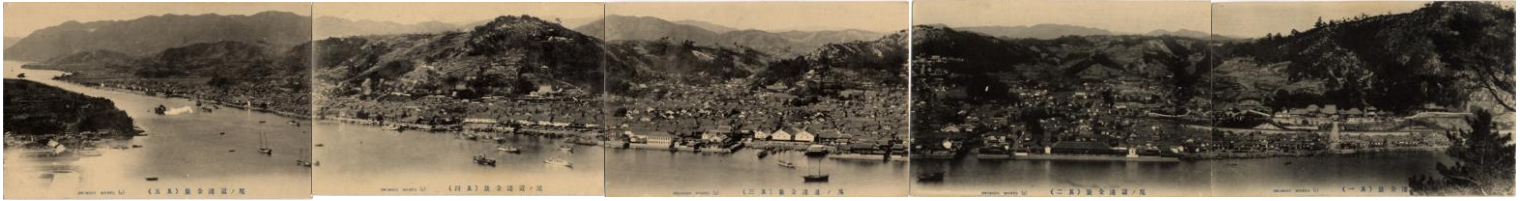
三津は、南北朝時代に都宇・竹原庄の外港として、室町期には船番匠が置かれ、港町として発展した。江戸期には慶安2年(1649)に「浦辺御蔵所(米蔵)」が置かれ、賀茂・豊田両郡の年貢米を集散した。明治40年の同角度からの写真では、中央にある白壁の土蔵の屋根が漆喰で修理されており、それより以前の撮影と思われる。

大崎上島木江町の港と町並み(豊田郡大崎上島町)



木ノ江港は昭和30年代までは潮待ち・風待ちの港として賑わっていた。絵葉書でも、数多くの帆船が停泊する港の活況が紹介されている。

尾道港の風景



尾道港の全景を写した大正期頃のセット絵葉書

尾道は瀬戸内有数の港町であるとともに、江戸時代から明治初期にかけて、広島県の経済的中心地であった。そのため、当初は尾道に県庁を置く案も出たほどである。

尾道の町並みは対岸の向島から一望することができ、繁栄の歴史を極めた町並みの壮観さゆえに、こうした全景のセット絵葉書が戦前・戦後を通じていくつも作られた。



尾道・銀行浜付近の風景

大正期頃と思われる。銀行浜は現在の尾道市公会堂の建つ海岸界限のことで、かつて第六十六国立銀行や住友銀行などが建ち並ぶ銀行街を形成していた。

中央左の海岸に並び立つ大きな建物は諸品会社の倉庫（蔵）。中央右に見える大屋根は浄泉寺。



尾道海岸通りの賑わい

昭和初期頃の様子。左の棧橋に停泊しているのは尾崎汽船の定期船。煙突にある斜めの二本線が目印であった。同汽船の航路は、太平洋戦争の激化により廃止され、戦後も復活しなかった。活気あふれる尾道港の様子がうかがえる。



尾道・住吉浜の風景

大正期～昭和初期頃と思われる。左手に住吉神社、その後方に千光寺が写っている。港町としての発展ぶりをうかがわせるように、帆を降した和船が居並ぶ。



昭和初期の尾道港（現在の中央棧橋あたり）の様子

停泊している船は大阪商船の汽船。当時この浜は尾道いちばんの盛り場として賑わっていた。

福山港の風景



明治 40 年頃の風景

(上) 福山港手城村の河口付近を航行する木造帆船。

(下) 入江の奥を遡航する同船。

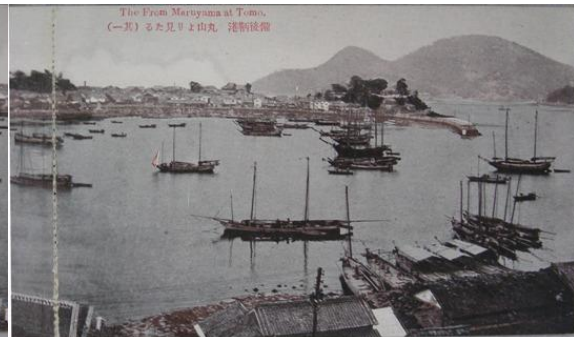
この入江は水野勝成が福山城を築城した際、外堀と海を結ぶ運河として開削したもので、大正初期頃まで、現在の福山駅前付近にあった外堀とつながっていた。



大正期頃の旧城下町付近の入江

多くの和船が航行・停泊しており、港の活況がうかがえる。後方の木造橋は木綿橋（新橋）。和船の帆柱の後方にかすかに福山城の天守閣と伏見櫓が写っている。このあたりの入江はすでに埋め立てられているため、当時の面影を偲ぶことはできない。

鞆の浦の風景



鞆港の全景を写した見開き 1 枚の戦前期絵葉書

波止場で半円状に囲われた港内に数多くの船が入船・停泊している。風待ち・潮待ちの港として機能する、鞆の浦の姿をよく表している。常夜燈・雁木・波止場・焚場・船番所という、江戸時代の基本的な港湾設備が全て揃って現存する全国で唯一の港である。



鞆港の焚場^{たてば}

かつての船はすべて木造船であり、船底にフジツボやカキなどが付着したり、船虫が付いたりした際は、船底を焼いて乾燥させる（たでる）ことによって船を長持ちさせていた。また焚場では修理も行った。

現在、焚場が残る港は極めて少ないが、鞆には現在も広い焚場が残っている。

○ 戦前戦後の観光資料～県立文書館の収蔵資料から～

● 戦前の観光案内書

会社企業の増加や公共団体の大規模化などにより、明治末期以降サラリーマン人口が増加し、一定の時間的自由や所得は「余暇」という概念を生み出した。「旅行」はそうした余暇の一つであるが、鉄道網が発達しはじめる大正期以降になると、“tourism”の訳語として「観光」という言葉が用いられるようになり、大正中期から昭和初年にかけて時代の最先端をいく言葉となった。

絵葉書の発行が盛んになるのもこの頃からであるが、それに先んじて、各地の名所・旧蹟を紹介する案内書が発行・販売されるようになった。広島では日清戦争の戦勝を機に名所案内が作られはじめ、明治末期から大正期にかけて、より簡便なものや詳細なものが作られるようになっていった。

『広しま名所 附名所誌』(明治 28 年)



明治 28 年 (1895) 4 月、広島市西横町の松村善助 (松村書店) が発行した名所案内。日清戦争の戦勝記念として発行したもの。初期の観光案内書らしく、写真ではなく絵と説明文で構成されている。大本営はもとより、水主町公園や草津梅林・「井ノ口之浮島」など、今日では見られない名所・旧蹟も描かれている。

『広島みやげ』(明治 35～38 年、計 4 版)

明治 35 年 (1902) 3 月に出版された戦前の広島を代表する観光案内地誌。その後、同年 6 月・12 月・38 年 8 月の 3 回にわたり再版されている。当時広島の絵葉書を数々発行していた絵葉書専門卸商・藤谷口〇堂の藤谷寅蔵らが関係して出版され、広島市内の各書店や呉・尾道・宮島などの駅構内売店でも販売された。

口絵写真と広島県の概略にはじまり、名所・旧蹟・官公署・学校・駅・交通機関などを紹介。巻末には鉄道の運賃・時刻表も掲載している。

一度出版したものに改訂を加えながら、地域性も示しつつ広島の実情を伝えようとする意図がうかがえる。また、本文は橋本雄洲が書いたもので、小冊子ながら、当時の世相や広島の町・近郊の姿が生き生きと書かれている。



(左) 第 2 版

(右) 第 4 版



『広島案内記 附厳島名勝案内』(大正 2 年)

大正 2 年 (1913) 3 月、広島市紙屋町の吉田直次郎が書いた観光案内書。発行は広島市東横町の書籍商・友田誠真堂 (友田藤助)。友田は、『広島みやげ』の第 2 版も発行していた。

広島やその付近、厳島の名勝・古蹟を広く紹介するもので、広島 の諸官庁・勝地・梵刹・神祠などをくまなく掲載し、また、遊覧の際の携帯に便利のように、内容は簡易を旨として、主要なことのみに記載している。とくに遊覧の時間があまりない人のために、著名な名勝・社寺が一目瞭然となるよう工夫し、それらの写真版を多く掲載した。

● 鳥瞰図の世界一吉田^{はつきぶろう}初三郎が描いた瀬戸内一

観光が一つのブームとなった大正から昭和初期にかけて、観光案内の折込みや新聞の付録などで盛んに使われるようになったのが鳥瞰図であった。「大正広重」の異名をもつ鳥瞰図絵師・吉田初三郎が活躍したのもこの頃である。初三郎は全国各地の鳥瞰図を残しており、その中には、瀬戸内の情景を描いたものも少なくない。

吉田初三郎（1884～1955）

京都市中京区生まれ。大正中期から昭和 20 年代まで約 30 年にわたって 1,600 枚を超える鳥瞰図を描いた絵師。その鳥瞰図はそれまでにない斬新な構図と大胆なデフォルメが特徴で、昭和初期にはすでに多くの収集家が現れ、交換会や集会も行われるほどの人気であった。

彼のもとには、鉄道会社を中心に多くの企業家や自治体のほか、政府や軍の高官、更には皇室に関係する人々まで実に多彩な人々から作成の依頼がきた。

特に、大正 3 年（1914）に描いた「京阪電車御案内」が皇太子時代の昭和天皇より賛辞を受けて以来、「図画報国」を胸に鳥瞰図の作製に打ち込み、昭和 2 年（1927）の「愛知県鳥瞰図」が天皇の御座所に掲額されて以来、天皇の御座所に初三郎の鳥瞰図が掲額されるのが慣例となった。

さんごせん
「三呉線沿線鳥瞰図」 昭和 10 年



三呉線（現・呉線）が昭和 10 年 11 月 24 日に開通したのを記念して作製された鳥瞰図。左に軍港都市である呉を大きく描きつつも、呉―三原間の沿線を絵の中心に置き、海岸線を円環状に描いた初三郎らしい壮大な鳥瞰図である。瀬戸内の多島海の情景を豊かに描いている。

「鞆町鳥瞰図」・鞆の浦絵葉書 昭和 11 年



鞆の浦観光協会が発行した鳥瞰図。初三郎はこれ以前にも、「日本第一景勝鞆の浦」（昭和 5 年）を作製していた。また初三郎は、絵葉書にも鞆の浦を描いており、港や仙酔島からの海の景観を、多数の和船と共に情緒豊かに描いている。鳥瞰図では、手前の仙酔島を大きく描いて海水浴場や料亭・鯛網の場所などを明示し、鞆の街と渡船で結ぶことにより、遊覧への関心をそそる描写となっている。

「石崎汽船航路遊覧名所案内図絵」 昭和2年



石崎汽船（本社・愛媛県松山市）の航路案内図として作製された鳥瞰図。同社は当時、尾道～松山間、宇品～松山間、尾道～糸崎～竹原～大三島間などの航路を有した。

尾道～高浜間航路経由で道後温泉への観光をPRしているが、途中の大三島や厳島神社への観光もいざなう。大三島の大山祇神社は国宝を8件所蔵し、「国宝の島」とも呼ばれる。松山を中心に描きつつ、瀬戸内海の魅力も存分に表現している。

「木ノ江町鳥瞰図」 昭和9年



大崎上島の木江港を描いた初三郎の鳥瞰図で、木ノ江町商工会が発行した封緘葉書に印刷されたもの。左上の署名には「瀬戸内海第一ノ魅力みなと木ノ江町」と書かれている。左に大きく描いた神峰山（453m）のふもとに、船が群居する木江港の発展ぶりを描き、その右側には、島の主要物産である石灰・石粉の採掘・製造所を描いている。

松山と尾道とを結んで航路が描かれているが、当時は木江から尾道へ往復16便、松山（道後）へは往復4便で、他に今治へ往復18便、広島・呉へ12便、竹原へ18便出していた。

「大阪商船瀬戸内海航路図絵」 大正14年



大正14年（1925）8月、東京の日本橋三越で初三郎による「島の展览会」が開催され、「瀬戸内海鳥瞰図」などが出展された。その同じ年に大阪商船株式会社（現商船三井）の航路案内に掲載されたのがこの鳥瞰図。地図とは逆に本州を下に四国を上を描いている。大阪から九州まで、瀬戸内海全体を俯瞰することができ、「小さき島嶼が基石を散らしたやうに多数に散布する」（脇水鉄五郎『日本風景誌』1939）という「多島海」の風景を見事に描いている。

● グラフ誌『LIVING HIROSHIMA (生きている広島)』

昭和 24 年 (1949) 5 月、被爆後の広島の実情と広島県内の観光名所・風景などを紹介した最初の本格的な写真集が『LIVING HIROSHIMA (生きている広島)』である。この写真集は、当初『グラフひろしま』として広島県観光協会の事業として出版が計画された。その後、事業の継続が困難となり、代わって田中嗣三 (1902~1994) が広島市下流川町に創設した「瀬戸内海文庫」に事業が引き継がれた。

広島の復興と観光を強く PR することを目的としたこの写真集の制作には、当時の一流カメラマンやグラフィックデザイナーがスタッフに加わり、予算的に困難な中、田中の強い意志と尽力により地元有力者の後援なども得て刊行された。

当時広島は、被爆地として世界から注目を集めており、『LIVING HIROSHIMA』も海外とくにアメリカへの販売が意識された。そのため、説明文は英文であったが、国内向けには日本語の解説文が添付された。被爆の爪跡を紹介する一方で、力強く復興していく広島姿、観光地としての広島県の魅力を紹介しようとする、発行者の意志が伝わる優れた写真集である。

田中嗣三資料

田中嗣三 (1902~1994) は佐賀県佐世保市出身。戦前に広島市へ転居し、堀川町の書籍組合等に勤務。被爆後間もない昭和 21 年 (1946) 春に瀬戸内海文庫株式会社を設立。総合雑誌『ひろしま』などを出版した。

昭和 54 年 (1979) 秋、『LIVING HIROSHIMA』など自身が発行に関わった出版物の関係資料を広島県立図書館へ寄贈。その後、写真原画などの資料群が広島県立文書館へ移管され、同館にて公開している。



『LIVING HIROSHIMA (生きている広島)』

(右上) 表紙

(下) 外国人観光客を意識し、本の中身は写真と英文。

(左上) 国内向けに用意された別冊の日本語解説集。

原画写真

『LIVING HIROSHIMA (生きている広島)』は、当時の本の紙質に限界があり、掲載された写真は必ずしも鮮明ではなかった。しかし、残された原画写真は本の写真に比べてかなり鮮明である。写真はいずれも昭和 22・3 年頃の撮影であり、60 年以上前とは思えない鮮明さで、当時の市街地の様子や県内各地の風情を伝えている。



